

1 志学地区の概要

志学地区は国立公園三瓶山の南側にあり、人口540人、世帯数253戸、高齢化率50.74%、自治会数は6自治会で、中には高齢化率が80%を超え限界集落に近い自治会もあるなど、中山間地域の持つ様々な課題があてはまる町である。そのような状況の中、先を見据えた取組として、早くから自治会組織の再編や協議会組織を立ち上げ、自主防災会を組織するなど、活動を盛んに行っている。教育も盛んで、他に例をみない保育園・小学校・中学校が同じ建物の中にあることで、保育園児と遊ぶ小中学生の姿を見るなど、子ども達の縦のつながりを強く感じる学校となっている。さらに、地域と結びついた教育の取組も特徴的で、地域に伝わる神楽の授業や、中学生が地元について追究する総合学習（SST）の取組は高い評価を得ている。

2 事業の趣旨

地域には少子高齢化に伴う様々な課題が多く、地域を挙げて対策に取り組む「未来会議（10年先の地域の在り方を考える）」を立ち上げている。今回の取組では、地域の課題は世代によっても捉え方が違うのではないかと考え、若者の考える課題を若者が取り組むことで、地域の抱える課題を改善できるのではないかという思いをもって取り組んだ。

3 具体的な取り組み内容

まちを元気にしたいという若者の集まる活動を中心に取り組み、地域を知る勉強会を開き、地域について真剣に話し、考える時間を設けた。活動を進めていくうちに、少し高い目標として「Iターン者の確保」を掲げ、「住んでみたい地域とはどんなところか」などの話し合いを進めた。Iターン者確保に成功している地区の事例や自分達の価値観

も考慮しながら、「仕事より余暇・自分の家族との時間を大切にする」などの若い世代の特性をふまえ、「楽しく暮らせる地域、遊べる地域」をアピールすることにより、若い世代のIターン者の確保につなげたいと結論付けた。取組としては地元の特徴でもある「雪」を活かし、若者の気を引くような遊び「雪板」に注目し、取り組むこととした。

(1) 主な取組

ア 従来からの取組

(ア) 情報発信（随時行う）

- ・ホームページ・SNS等の更新
- ・地域情報誌の発行フリーペーパー「カムカム三瓶山」
夏号 秋号 冬号を発行

(イ) 企画実践の場

- ・ふうりんおんせん 7/1～8/31
1,000個の風鈴を設置
- ・山の日フェスへの参加 8/11
- ・さんべ志学の雪あかり 2/10

(ウ) カフェの運営 情報交換や交流

8/11、10/13.14、11/11



（「ふうりんおんせん」でのカフェの様子）

イ 新たな取組

(ア) 雪板の作成と実践

木工体験施設に協力していただき、手探りでの製作を行う。製作日数2か月。



(試行錯誤の「雪板」の製作作業)

4 評価と反省

(1) 活動の継続

仕事や家庭事情などから参加が減ったが、6人が集まり活動することが出来た。

(2) 目標値の決定

若者目線での目標値を掲げることで、より明確に自分たちの活動の意味を意識できるようになった。

(3) 楽しく活動できた

雪板という取組が予想以上に楽しく、活動回数も多くなり、次年度以降の「仲間づくり」に手ごたえを感じた。

(4) 人員不足による作業の遅れや負担感

参加人数が減ると、それまで分担していた作業を誰かがフォローする必要性が生じた。人員に対しての活動を少し見直し、整理する必要がある。

5 今後の課題と見通し

(1) 課題

ア 活動資金の確保

取組内容も多く、必要となる費用も多い。補助金に頼らずに資金が確保できる方法を考えていき、自立した団体を目指したい。

イ 仲間の確保

集まりやすい場や工夫が必要と思われる。新たな仲間を取り込み、活動を続けたい。

(2) 見通し

ア 雪板の活動を本格化し、ワークショップの開催、制作、遊ぶ、集う、行動までを企画し、大きな目標である「若い世代のインターン者の確保」につなげたい。

イ 若者による地域づくりをより進め、楽しい遊び場から楽しく住んでみたい町に向け、情報発信や活動を続けて行きたい。



(完成した「雪板」で初滑り。旧スキー場跡地)

地域課題は地域様々、そして世代ごとに感じる地域の課題も違う。今回は若者による地域づくりの観点で活動を行った。若者が取り組みやすく、やってみたい取組は、やはり、他の世代と違うのだということを実感した。よくいわれる「若い者がやらないでどうする」とか「若い者が参加しない」という課題は何処にでもあるが、そもそも問題視している視点が違うのではないかと感じる。無理やり引き込んでも、その結果、やらされ感が増し、活動から離れていくという悪循環に陥ってしまう。それぞれの世代がそれぞれの課題に対し活動する事が次世代へのバトンへと繋がっていくと感じる。やれることをやれる範囲で続ける。目標を明確にするなど地道な活動こそが今必要だと感じる。今後も若者によるまちづくりを継続して行きたい。

(文責：志学まちづくりセンター 三谷和弘)